

地元新聞に投稿 高退協会員

高知新聞で高退協会員の投稿が時折見受けられます。「オビニオン」や「投書」に研究発表や主張、社会や日常への感想などが掲載されているのを「発見」すると、記事を読むことがとても楽しいひとときとなります。今回「声 ひろば」に掲載された土居修さん、谷内純一さんの投稿を高退協ニュースに転載しました。

母とフキを採る日々
土居修

(2020年4月7日 高知新聞「声ひろば」掲載)

退職して3年目の春。さわやかな陽光を浴びながら年老いた母と山野に入り、フキを採る日々を続けている。還暦を過ぎ気力も衰え始めている息子が、こじ敷い年々米寿をおかえるが、なお麗々(かくしゃく)としている母と同じ時間を共有しているのである。半世紀以上を越えて再現されている原風景。「心の故郷」に帰り着いた喜びと安らぎが私にはある。

母の心奥は知る由もないが、苦境ばかりを背負ってきた母も同様の思いを抱いてくれれば、と私は勝手に願っている。

母の摘み取りの技は熟達域に達している。私のおよそ2倍の収穫量。24歳も若い私が負けるのである。

「どうしてそんなに多いが」「慣れよ、慣れ」。たわいのない会話である

が、母と子に豊かに流れていく時間はなによりも尊いと思ふ。

若いころには、決して言ってはならない言葉を幾度となく投げつけた記憶。涙をいっばいしたながらも、私を優しく包み込んでくれた母であった。深い海のような愛情であったと今にして思う。

何と愚かな息子であったことが、私の摘み取り量が少ないのは、経験の差だけではない。母への限りない感謝が、私の手の動きを鈍らせているのである。

相模原銃傷事件に思う

谷内純一

(2020年3月27日)

高知新聞「声ひろば」掲載

3月16日、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」の入所者銃傷事件の判決があった。植松聖被告は、判決後も障害者を殺害することについて

て自己を正当化し、反省する態度は見せていない。

この植松被告を説諭し、反省させることができる人物はこの日本にどれだけいるだろうか。高知新聞には「差別発言を繰り返した被告の動機の根底は十分に採られず、後味の悪さも残った」とあった。

私は植松被告の動機の源は劣等感であり、劣等感の裏返しであると思う。世界で時折発生する銃乱射事件の犯人たちも同じだと思う。自らを肯定できて自己に充足している人は、他者を見下すことによって自己の精神の安定を保とうとする必要がない。

してみれば自己肯定感を育てることが学校教育、家庭教育、社会教育のいずれの場においても最も重視されなくてはならないと私は思う。

そのためにできること、それは「自分を褒める」ことにつきると思う。皆さん、他人を自分を褒めましょう。

はかばかすも「目玉焼き」で妻に吐かれたこと

土居修

花冷えの午後であった。ジャガイモを植え終えて見上げた空に巻雲が広がっていた。額に汗する喜びを享受しながら絹のような光沢に見惚れていると、無性にウスターソースをたっぷりとかけた目玉焼きを食べたくなった。

しばらく味わっていいいな。思わず呟くと、旧懐の情とともに、新婚当時に妻に叱られた記憶が不意によみがえってきた。

食卓にトーストとサラダと目玉焼きを並べ、新妻がほほ笑んでいた光景。しかし、衝撃的な結末。30数年の歳月が流れ去っているが、その早春の朝はいまなお、忘れ難い。「トーストでいいわね」「妻はコーヒーを白磁のマグカップ

プに注いでいる。これと違って有田焼にこだわった訳ではないだろうが、入籍前に妻の要望を受けて購入したものである。「洗練された白色って、素敵でしょ」。よくわからないが、相槌を打つしかなかった。「ウスターソースを持ってきて」「えっ」

一度、私は言った。「どうするの」

「目玉焼きにかけるとだよ」その瞬間に妻の表情が一変した。初めて目にする形相。今までの雰囲気とは明らかに違うと悟ったが、豹変した理由がわからなかった。ただ、これが彼女の本性だとしたら私は人生を棒に振ったなどばんやり考えたことだけは憶えている。

「ちょっと待って。なに考えているの」「なにが」「どうして、ウスターソースをかけるのよ。冗談でしょ」「冗談なんか、言っか」

目玉焼きを食べながら、妻のことは反芻した。柔らかな春の光線が白いレースのカートンを透いていた。とめどなくあふれてくる憐憫の情。この絶妙な味を知らずに生きてきた妻の24年間に思いを馳せるとせつなかった。目玉焼きでなく、それがアジフライであったとしても、妻は私を叱つたにちがいないと思つた。

私は時に峻烈にもなるが、極めて寛容な人間であると自負して生きている。その朝もそうであった。だから、ウスターソースの魅力を語らない妻の食文化にも理解を示し、許容するができたのである。私の食文化と次元が違っていたにすぎないと納得したこと

を懐かしく思い出す。その後、目玉焼きの食べ方について妻と話したことはない。時おり妻の目を盗んで、ウスターソースをたっぷりかけた目玉焼きを食べている。至福を感じる瞬間といつてよい。

かつてホーム通信にこのことを記したことを思い出し、冊子を繰ってみた。確かにあつ

た。2013年5月15日発行第23号に「カレーライスと目玉焼きの食べ方」として2003年度久礼分校3年生23名に聞き取り調査した結果を紹介していたのである。蛇足と知りながらこの号を転記して、今回の「妻に叱られたこと」を閉じようと思つた。ただし、前半部分に「カレーライスの食べ方」を紹介しているの、後半部分のみとさせていだけよう。

ちなみに、「目玉焼き」の食べ方も紹介しておこうか。2つ以上の回答をした女子生徒もいる。したがって、実際の人数より多くなっている。

- ・塩コショウ(6人)
 - ・マヨネーズ(5人)
 - ・しょうゆ(5人)
 - ・和風ドレッシング(4人)
 - ・ソース(3人)
 - ・ケチャップ(3人)
 - ・ケチャップとソース(1人)
- 「目玉焼き」に「塩コショウ」は、最も歓迎されている食べ方である。しかし、それ以外の食べ方があつてもよい。

繰り返して、言わす。「食」は、文化であるのだから。ついでにいえば、ホーム主任は生まれてからソース派であったが、結婚以来、妻に変な眼でみられるから、今ではしょうゆ派となつてしまっている。悲しいかな。しかし、妻のいないところでは、あくまで、ソース派である。

